

一八

櫻城山口忠顯詠

生徒  
必讀

日本名勝詩歌

東京 関文堂梓



大隅 種子嶺時恕先生園并ニ序  
橘城 山口忠顯先生著

○生徒 必讀 **日本名勝詩歌** 寸珍 美本 定金三錢

此書ハ日本全國有名ノ地ヲ以テ今様歌ニ綴リタル者ナレ  
ハ小學ニ業ヲ受ルモノ常ニ之ヲ誦讀セバ他日地理ヲ學ブ  
助トナルベキ輕便簡易ノ好本ナリ

橘城 山口忠顯先生閱  
東京 美濃部重成著

○體列 必携 **運動歌** 寸珍 美本 定價金三錢

此書ハ小學生徒ノ便ニ供スル歌詠ナルガ故ニ務メテ簡易  
ヲ旨トシ且古人ノ活潑英雄ナル氣象ヲモ併セ舉テ專テ幼  
兒ノ薰陶ニ便リシ總テ教育上ノ助ト爲シタル讀本ナリ

正四位勳二等福羽美靜公序  
興學書院長三尾重定君詠詞

再版

○生徒教訓歌

寸珍 美本 定價金四錢

此書ハ幼稚教育ヲ旨トシタル今様歌ニシテ古人ノ懿德善行ヲモ雜ヘ述ベ毫モ粗本ニ亘ル無ク叮嚀反復實ヲ以テ編チ成シタル者ナレハ小學生徒正課外ノ讀本ニ充ントスルニハ適切無比ノ美本ニシテ古今獨歩ノ珍籍ナリ

三尾重定君叙辭  
鈴木重義先生著

○生徒體操歌

同上 定價金三錢

此書ハ生徒体育運動ヲ獎勵スヘキ歌詠ヲ撰ヒ且伊呂波四十七字ヲ以テ歌首ニ冠セシメ專ラ幼兒ノ誦謠ヲ便ニシ精神活潑氣象涵養等總テ教育ノ本因ヲ盡シ極メタル完全無類ノ好本ナリ

特66  
617

生徒 必讀 日本名勝詩歌序

教育も嚴酷を以てする時ハ之を見ること鬼神の如く感々として其精神を發達する能はず悠寛を以てするときハ之を見ること朋友の如く其威儀を恐れず其心體を堅固にする能はず如此ものは其天姓を養ふ能はず終に之れを害ふに至る厠に教育は嚴ならず寛ならず中庸に之て而て懇篤よ教訓し其天賦の性を失ハしめき智識發達精神健固ならしむるを要する也矣古者大司樂之職成均の法を掌り以て一學士の教を立つ其旨深矣琴瑟之れを友とし鐘鼓之れを樂

正四位勳二等福羽美靜公序  
興學書院長三尾重定君詠詞

再版

○生徒 必讀 教訓歌

寸珍 美本 定價金四錢

此書ハ幼稚教育ヲ旨トシタル今様歌ニシテ古人ノ懿德善行ヲモ雜ヘ述ベ毫モ粗本ニ亘ル無ク叮嚀反覆實ヲ以テ編チ成シタル者ナレハ小學生徒正課外ノ讀本ニ充ントスルニハ適切無比ノ美本ニシテ古今獨歩ノ珍籍タリ

三尾重定君叙辭  
鈴木重義先生著

○生徒 必携 體操歌

同上 定價金三錢

此書ハ生徒体育運動ヲ獎勵スヘキ歌詠ヲ撰ヒ且伊呂波四十七字ヲ以テ歌首ニ冠セシメ專ラ幼兒ノ誦謠ヲ便ニシ精神活潑氣象涵養等總テ教育ノ本因ヲ盡シ極メタル完全無類ノ好本ナリ

特66  
607

生徒 必讀 日本名勝詩歌序

教育も嚴酷を以てする時ハ之を見ること鬼神の如く蹙々として其精神を發達する能はず悠寛を以てするときハ之を見ること朋友の如く其威儀を恐れず其心體を堅固にする能はず如此ものは其天姓を養ふ能はず終に之れを害ふに至る願に教育は嚴ならず寛ならず中庸に之て而て懇篤よ教訓し其天賦の性を失ハしめど智識發達精神健固ならしむるを要する也矣古者大司樂之職成均の法を掌り以て一學士の教を立つ其旨深矣琴瑟之れを友とし鐘鼓之れを樂

二 ひと古今海外諸邦亦皆樂曲あり幼者必之を習ふ是亦自然の道也蓋徳性を養ひ腸胃を調ひ筋骨を固ふする者也故よ大小學校必唱歌咏曲無んばあるべからむ吉澤富太郎氏深く之れを考ひ廣く之れを正し予が學友橘城山口忠顯ぬしお名勝詩歌を作らしむ苟小學生徒たるもの正課外の讀本としてよく之れを暗唱し地理學研究の補助となさしめば實に先王の遺響を繼而天下の風俗を美よし其功用亦大なりといふべし矣鹿兒島縣大隅國高千穂止水種子島時怒しるす

生徒 必讀 日本名勝詩歌

橘城山口忠顯詠

赤坂 武藏國東京皇城の西あり  
今上天皇仮皇居の地

畏<sup>か</sup>者<sup>も</sup>こ<sup>の</sup>け<sup>れ</sup>と<sup>も</sup>内<sup>ち</sup>日<sup>ひ</sup>刺<sup>さ</sup>  
 定<sup>さだ</sup>め<sup>た</sup>給<sup>たま</sup>ひ<sup>て</sup>天<sup>あめ</sup>か<sup>の</sup>下<sup>した</sup>  
 百<sup>もも</sup>の<sup>の</sup>司<sup>つかさ</sup>は<sup>は</sup>大<sup>おほ</sup>内<sup>うち</sup>よ  
 立<sup>た</sup>伺<sup>さも</sup>候<sup>うひ</sup>て<sup>て</sup>大<sup>おほ</sup>御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>を  
 隅<sup>すみ</sup>田<sup>た</sup>川<sup>がは</sup> 武藏國東京あり上流を綾瀬  
 川<sup>がは</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>ひ<sup>は</sup>末<sup>すえ</sup>流<sup>りゅう</sup>を<sup>を</sup>六<sup>む</sup>郷<sup>ごう</sup>川<sup>がは</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ  
 長<sup>なが</sup>閑<sup>かん</sup>さ<sup>の</sup>風<sup>かぜ</sup>の<sup>の</sup>音<sup>ね</sup>清<sup>きよ</sup>さ<sup>さ</sup>  
 春<sup>はる</sup>の<sup>の</sup>氣<sup>け</sup>色<sup>しき</sup>の<sup>の</sup>ほ<sup>の</sup>く<sup>と</sup>  
 赤<sup>あか</sup>坂<sup>さか</sup>の<sup>の</sup>宮<sup>みや</sup>に<sup>に</sup>高<sup>たか</sup>御<sup>み</sup>座<sup>くら</sup>  
 所<sup>しよ</sup>知<sup>し</sup>食<sup>じゆ</sup>す<sup>す</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>我<sup>わが</sup>大<sup>おほ</sup>君<sup>きみ</sup>  
 外<sup>まへ</sup>國<sup>こく</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>御<sup>み</sup>門<sup>かど</sup>べ<sup>よ</sup>  
 安<sup>やす</sup>か<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>そ<sup>そ</sup>守<sup>まも</sup>護<sup>ろ</sup>な<sup>な</sup>れ  
 隅<sup>すみ</sup>田<sup>た</sup>の<sup>の</sup>渡<sup>わた</sup>り<sup>り</sup>こ<sup>こ</sup>ゑ<sup>え</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>は  
 風<sup>ふ</sup>情<sup>じやう</sup>め<sup>め</sup>て<sup>て</sup>た<sup>た</sup>き<sup>き</sup>詠<sup>えい</sup>め<sup>め</sup>か<sup>か</sup>な

四

更科越路は月よよし  
東京隅田の花よよし

さらしな越路は雪よよし  
東京隅田は酒によし

同

大日本島根も盛りある

言葉の花も春されば

また美はまくにほふらん

すまたの櫻山吹も

武藏野

東京の地の舊稱今武藏  
國多摩郡に其跡存す

いつか妻木の斧の音

梢の嵐猿のあゑ

正木のかつらくる人も

まれと聞しは昔よて

今のことさら立かわり

妻木もこらす猿も居す

好風景かきりあき

花の都となりよけり

上野飛鳥

東京皇城の北よあり櫻の名所なり

今日の上野の花よくれ

明日の飛鳥の山櫻

花に心もうつそ身の

身ようきとも知らずして

富貴自在に長閑なる

御代を送るも大君の

みめくも深き故なるぞ

ことしが程もわするなよ

氷川神社

官幣大社氷川神社武  
藏國大宮驛にあり

治國利民の神域と

鎮坐して二千余の

年を重ねて神徳を

かがやかします大宮の

氷川の神は大己貴

速素盞雄と稲田姫

今朝廷の御規則に

官幣大社といつき坐す

五

むかし貞盛繁盛と

兼任兄弟將門を

六

退治の爲に東國に

武運の守護を祈りしが

凱陣せしむ大宮の

道灌山

秋とし聞バ虫塚に

その清音をもてはやす

金琵琶の音のさわやか

酒呑歌ふ人多し

根岸

鶯の音もうるはしく

春は櫻ぞにほふさる

軍を向しその時よ

靈應果してすみやかに

神の御稜威と仰ぐ哉

東京に在るは新堀北の平塚に接す

太田道灌砦城の跡なりと云

詞人吟客終夜

松虫莎鷄さりくす

晴渡る夜の月を見て

酒のみ遊ぶ人多し

蛙のこゑもさわやか

秋ハ紅葉に賑ひぬ

根岸のさとは里うらか

松の梢を吹風も

石濱古戰場

正平七年閏二月

万騎

は小手指原へ八万余騎

二十万騎いり乱れ

急よ敗れたり

軍よ告たるハ

に父の仇

七石濱

所からうもあよとなへ

しらへゆしく聞ゆなり

東京にて今橋場といふ

地をすへていふ

義貞義興義宗か

其勢凡十

時に將軍高氏

新田足利兩大將

戦ふをりに足利の先陣

後陣も進めず敗走す

義宗諸

我らか爲

天下の爲に朝敵の

此戦に高氏か首を取んと退行て

日わくれ渡り川の瀬

八も 見るぬをなげさくやまくも はがみをな  
して引戻す

葛西 東京を距る三里千葉縣に接す

隅田村堤青柳の 放髪もことさらよ

花のよそはひ美しく 縁の眉の綾瀬川

葛西の里は家ことよ 四季の草花を植ならべ

芳香常に馥郁と 風情めてたき所かも

國府の臺 千葉縣市川驛の北よ

文明年中下総の 臼井の城に楯籠る 一掻の

兵をはらはんと 大田道灌兵をあげ 國府の

臺こそ究竟の 要害なりと陣城を 取建し後

ほととさきて 天文六年十月に 足利北條事あ

りて 戦たるも利なくして 足利義明討死す

後また永祿七年に 大田康資兄弟と 里見

美弘小田原の 討手をうけて敗れさり 此所

はそもく共むかし 國府の五郎の居城なり

明治の御代となりしより 畏こけれとも敕命

下したまひて長に 御國を守護大夫に 軍

の道を教ゆなる 教導團を設けらる 治まる

御代へめてたけれ

眞間の浦 國府の臺の南よて 勝廉の浦といふ

九眞間の浦まをこぐ船の 舟人さへもをさまれる



御代はさわがず浪立也

風も音せず鳴もせず

真間の手兒名の舊跡

國府の臺の麓にあり

手兒名といひしその人は

真間の古井よ汲水の

の淺うらねともあさましき

やれ麻衣を身

あまどひ 其容貌の妙へなるを

望月の如花

の如立るをみては相競

咲るを見ては相競

夏の夜虫のともし火よ

湊よ船の入ことく

いひよる人の多かるを

手兒名いいか、おも

ひけん 海に其身を投したり

後世社を營て

手兒名の神と齋なり

手兒名の神と仰ぐあ

高 繩

東京皇城南の海岸也

物懐ましく物すこく

狐妻よひ狸子を

さそふ夕の風寒く

名も高繩の浪よりも

糸のしらへの音高く

鴈は眠る暇もあし

あなれもしろくにきわしき

大御代とこそなりにけれ

實盛の墳

東京湯島神社の麓にあり

都大路を北へゆく

湯島の岡の下道よ

の垣根の一搦ひ

住人もまたなよ竹の

立て古墳は

齋藤別當實盛の

首塚なりとい

ひつとふ 眞よ然るや然らずや

九段坂靖國神社

東京皇城北にあり

一里進めば又一里進めやすめ今一里三  
 里すすみて見渡せば此所は都の九段坂玉  
 室國家の爲よ死す人の神魂を招奉り王城  
 守護の靖國と御名を稱へて千木高く柱は  
 石よ大敷て仕奉れる神事を拜み奉れん大丈夫  
 は如斯こそあらめ海往ばまつく尸よ山行  
 ば草むす尸畏しこくも天皇の御爲あら  
 捨る命も惜からん

東台公園 東京東叡山なり

王政復古の其始め 明治元年二月に 大総督  
 府有栖川 薩長因備の兵を率 東海道を登り

きて 錦旗閃々威勢能 進みよすれん畏しこ

みて 徳川武將忝順の 實功あらん玄東臺の

上野の寺よ退そけの 旗下の面々脱走し

所々村落に屯集し 骨肉相食人情の 忍ぶへ

からぬ勢を 朝廷厚く思し召し 民の塗炭を

救いせし 後ハ干戈の勞もなし 千秋万歳動

きなき 九重に咲く八重櫻 朝日に匂ふ花の

香の にはほひ長閑き大御代と 四民娛樂をき

わめつゝ 上野のさとにうち集 春ハ櫻にを

とめさび 秋ハ紅葉にねさなさび 酒のとも

そび歌ひ舞ひ 愉快を盡す公園よ 共進會を

四十

設けられ 短を捕み長をとり 工業日々に進  
み行むかしにまさるありさまの 目出たき  
御代となりにけり

其二

武將政事を奉還し 即事に開城なさしめて  
官旗を迎ひ奉り 其時西郷隆盛ハ 参謀官の  
職あり 早くも 諸隊に號令し 數百万を打  
揃ひ 官軍一時に入來り 城兵事の急なるを  
周章狼狽限りなく 一人争ふものもなく  
この形狀を幕兵ハ 遺憾と思ひ北越や 或ハ  
蝦夷よ屯據を考 都にのこる人々ハ 宮を守

五十

花のさかりハ錦繡の 林をなして一目に  
千里前後のあかめなる 小金井橋に乙女子が

護する名をかりて 黨を結びし彰義隊 其年  
五月十五日 東叡山に集ひしに をりしも五  
月雨降つやき 大雨の中ハ 大炮ハ 雷の如轟  
きて 天地よひやく勢ひに 軍務参謀指揮を  
なし 攻るや否や東臺の 兵ハ黒門押ひつき  
大力打かさし鎗とつて 力戦せまも力らつき  
討死したる武士の 命は露とききてしも  
此所よ尸を葬りて 戦士の墓と稱すなり  
小金井 東京を距る三里武藏國小金井村

六十

酒を煖茶を煮も  
都の韻士墨客を

開花の里のなほひよて  
招く風情のおもしろさ

氷川八勝

官幣大社氷川神社近傍あり

氷川の神社祇園橋  
木の下 稻荷一夜塚

猫狸の橋清水坂  
石神井の社阿蘇の宮

鳴川

京都吉田山の麓にて  
古歌に多くよめる

氷底澄て照月を

行てもみはや鴨川の  
その

西岸に三本木

東の方より如意か嶽  
月待山よ

神樂岡

新黒谷の寺院あり

東堤をあかむれ

往來にさほふ

ところなり

京都府山城國  
愛宕郡あり

愛宕と申す御社の  
尊をこそ祭るおれ

伊奘冊尊火産靈の

火燵 権現櫓が原

清瀧川や渡猿橋

日敷ふれども愛宕山と

堀川百首に顯仲が

佐藤兄弟之塔

京都小松谷三島  
社の近傍あり

佐藤繼信忠信の

忠肝義膽の人おして  
漢の

紀信や宋の世の

天祥なとみもたとらさる

嗚呼英臣を英臣ぞ

されば美名も後世よ  
か

いやぎよけりかッやけは

永仁三年其二月

法西といふ人ありて

石の大塔二基を建  
今

七十

馬町の北側の村落まことを行けれ

小松谷

京都小松谷正林寺といふ大佛殿の東北にあり

重盛公の山莊を

僧原空の千とせふる

小松のもとをすみかよて

無量壽佛の迎ひをそ

まつと詠れし歌の如

小松谷とぞ今もいふ

昔し禪定兼實の

御所ととなひし小松殿

長岡

桓武天皇延暦三年奈良の京よりか

山鳥の尾の長岡と

つらせ給都あり山城國上羽村也

業平朝臣の母君の

住しどころなりこゝありと

伊勢物語よみし人

尾花か袖をしばりつ

荻か花妻か

けきて昔しを感念玉ふを

鬼が洞

山城國大原八瀬の北一里にあり

酒頼童子の洞なりと

羅山の集み稱じたる

洞へこの洞鬼が洞

昔し西塔辯慶か比叡の

山より提來る

背競石の八尺余天満宮のま

べにあり

矢背と名に負ふその故か天武大

友御位を

諱ひまし、戦ひよ軍人らがかし

ことも

射奉れぬ御脊よ矢の立たれと日な

らすに

御平愈の爲つくりたる竈風呂今に

のこりたり

功能勝れしものあらん

近江八景

滋賀縣近江國滋賀郡栗太郡にわたる

琵琶湖のるか見渡せば

淡海八勝連綿と

政治家郷も魂しひを

うこかし給ひ佳境あり

三の峯稻荷

京都伏見街道大和大路の南にあり

大和大路のいなり山

花の梢の白和幣

松の

梢の青和幣

そら吹風もうらくと

時の調

子よりつりゆく

おのつからなる神かくら

けに面白の調かき

けよれもしろのしらべか

な

八嶋

讃岐國三木郡あり檀の浦に接す源平の古戦場也

かの能登守教経の

太郎兄弟引連で

辨中納言知盛と

ともに海にそ入にける

その時二位殿仰せよ

我身は女なりとて

天皇よ射向し

奴か手よの死なしとて

安徳天皇守護をなし

大海原のいでましき

すめ奉れば畏れこくも

東の方に向いせて

天照し坐す大神に

御いとま乞申さしめ

いでまし玉ふ御こゝろそ

あわれ畏しよし畏あかる

吉野山

大和國吉野郡にあり

垣根の小草もゑいつる

頃とし聞の春霞空

うらゝかよ山櫻

ほころひ初るみよと野の

よしのゝ山よをとぬ子が

赤前たれはうるは

しくきとふすかたのめでさくも

はるの色

とぞみゑよける

大内山

名所集要よ山城の部に入古  
歌よ多し皇居をさして云

頼政其時しけ藤の 弓よとかり矢とりろひて

はあつその矢はあやまたす かしら猿尾はくちなは

足手は虎の如くなる けしきげものを射しより

大内山おほうちやまの事もなく 大内山おほうちやまを榮さかるける

龍田山

官幣大社龍田神社堺内あり  
大和國平郡にあり

龍田たつたの山やまの山風やまかぜに ちるも美ぢばのからよし

錦にしきのむしろしきりさね かさねかさねし

盃さかずき乃な 數かずを重ねて處女子こゝろか 錦にしきをきそふも美

ちかり いといと竹たけのしらへよく いとめつ

ふしき風情ふうせいかな

唐崎の松

近江は景は属す

松まつの木きかけよ立たちよれハ 十八公じゅうはちこうのいろみえて

縁ひだりもふかく萬木ばんぼくよ 勢いきほひすくれて木高たかきも

此このからさきの松まつなれや 秦しんの始皇しこうの狩かりの

時とき 雨あめをししのきし大松おほまつも かゝるめて度松たきまつな

れや

小夜の中山

遠江國榛原郡えんげこく へしげんぐんよあり  
古歌ふるうたよ多く詠よる

治ささる御代みよハことともあし 小夜さよの中山おかのやま來きてみれハ

助たす笛ふえ ふき狐舞きつねまひ 猿さるさく拍子ひたうしうちなふし

石いしの鳴音なぐねもことさらよ あちねもいろの調しらべかち

世よのうらとつわすられて 都みやここひしくねもふなり

小倉山

京都愛宕の南よあり

黄門定家の佳れたる 名高き小倉の山莊ハ

厭彌庵ある門の内 柳の水の清泉あり 少し

く高き西南の方ふあたりし石垣ハ 建治元

年その四月 冷泉宗家を立つ

春日神社

官幣大社春日神社大和 國添上郡春日山の鎮坐

なら坂越て三笠山 春日のさとも宮柱

太いき立て天皇の 御代の守りといつきます

武雷と経津主の 神の命どもる人よ

神慮をわかめ奉れ 神慮をあがめたてまつれ

生田

兵庫縣舞津國兔原郡兵 庫神戸に接す

雲井をいでて行月の 南よめくる小車の 淀  
の川瀬を打過て 生田の森のみやしるを ね  
かみ奉りてすまの浦 明石の浦や一の谷 扱  
面白旅ののそら さてれもしろの旅のそら

羽田

東京羽田村の南の洲崎をいふ

羽田の浦を見渡せば 東は滄海漫々と

みなみハ玉川混々と 富峯の雪は青流よ

映ずるかけのきよらかよ 海老取川を西にみて

北は峨々たる筑波山 手よ取ばかりみゆるなり



明治十九年十二月廿二日版權免許  
同 年 同 月 出 版

著 者

千葉縣平民

山 口 忠 顯

神田區猿樂町  
一丁目一番地

東京府士族

出 版 者

吉 澤 富 太 郎

本所區松井町  
三丁目拾番地

明治十九年十二月廿二日版權免許  
同 年 同 月 出 版

千葉縣平民

著 者

山 口 忠 顯

神田區猿樂町  
一丁目一番地

東京府士族

出 版 者

吉 澤 富 太 郎

本所區松井町  
三丁目拾番地

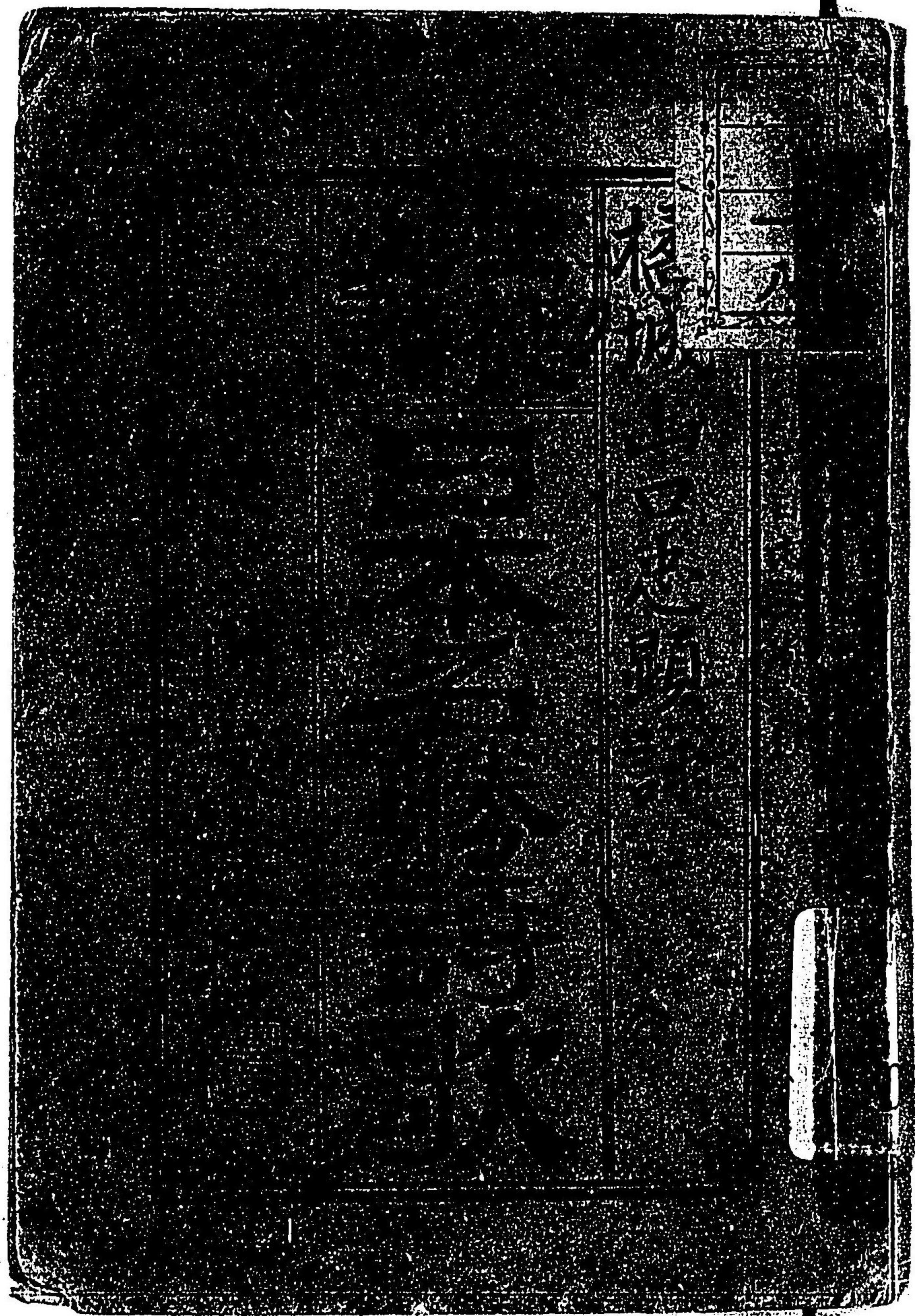
大日本圖書會館藏

一函

一架

八號

一册



085418-000-7

特66-607

日本名勝詩歌

山口 忠顯/著

M19

DBC-0394

